Japanese association of educational psychology

自主シンポジウム　21

読み書き能力の発達をめぐって

－　生活の中での読み書き活動へのアプローチ－

企画　秋田喜代美（立教大学）
司会　無藤　隆　（お茶の水女子大学）
話題提供者　今井靖親　（奈良教育大学）
内田伸子　（お茶の水女子大学）
高橋　登　（大阪教育大学）
秋田喜代美（立教大学）
指定討論者　茂呂雄二　（筑波大学）

現在の日本では、多くの子どもたちが文字の世界に足を踏み入れるのは主に幼児期であり、生活や保育を通して読み書きの習得が行われている。読み書き能力に関する心理学研究は、読み書きのためのレディネスという視点から音韻的自覚や文字の識別能力など読み書きに必要な下位技能を明らかにし、またその技能の学習を促進する要因に関して数多くの有意義な知見を提出してきた。さらに近年では、これらの知見を踏まえながらも、Emergent Literacyの語で表現されるように、社会文化的視点を取り入れた研究が行われてきている。

そこで本シンポジウムでは、社会文化的視点を取り入れて初期の読み書き活動に関する研究を現在実際に行っている４人の研究者が、それぞれ自分の研究を紹介するとともに、読み書き能力の発達に関する今後の研究課題とその課題へのアプローチ方法に関する考えを各自の立場から提示し、初期読み書き研究の新たな方向性を探ることを試みる。また司会者、指定討論者にも生活の中でのことばの発達に関して研究を積んでこられた方々にお願いし、積極的な討論をもちたいと考えている。

《幼児における文字意識の発達と読み》

今井靖親

言語は通常「音声言語」（spoken language）と文字言語（written language）とに大別される。「前者は乳児期からその発達が始まり、人間社会の中で生活している限り、特に意図的な学習過程を経なくても獲得されていくのに対し、後者の習得には意図的・教育的過程が必要」（福沢,1979）と考えられている。

では、子どもの「文字言語」は何歳頃から始まるのであろうか。わが国では、常識的には、就学前（５～６歳）に、幼児が或る文字と他の文字との差異を見分けたり（文字弁別）、或る文字にその文字固有の発音を結びつけて発声したり（文字読み）することの可能な時期からだとみなされている。しかし、事実は決してそうではなく、幼児が文字を読むようになるずっと以前から、日常生活の中で直接的・間接的に「文字言語」との接触が行われている。

このような「文字言語」との多様なかかわりをとおして、幼児は文字の弁別や読みを学習する以前に、まず身近にある「文字言語」の存在に気づき、次第に文字というものの表記的・統語的・意味的特徴についての理解を深めていくと考えられる。そしてこの時期に彼らが獲得する文字意識（print awareness）あるいは、文字概念が、その後の文字の読み・書き能力の発達を支える重要な要素となっていると思われる。

読みの発達に関する研究においても、従来は文字の弁別や読みについての検討が中心であり、それ以前の、文字の存在に気づいたり、文字の特徴を理解したりする段階の発達については、天野（1970）,河井（1978,1979）,今井（1982a,b）などの他には、極めて限られた研究しかなされていない。

今回のシンポジウムでは、読みの発達に関する心理学的研究の一環として、幼児の文字意識と読みの発達に焦点を当てた研究を取り上げ、話題の提供を行う。

《語りことばから文字作文へ》

内田伸子

子どもが、文字に関心をもつ時期や、読み書きに関連する活動を好むかどうかには個人差や性差があるにしても、いったん覚え始めたらごく短期間にどんどん習得していく。文字習得の過程について、３２名の子どもとその親、教師の教授を対象にした短期縦断研究の結果を踏まえ、一次的ことばから二次的ことばへの移行という観点から考察する。

NII-Electronic Library Service